

文春文庫

奈落

瀬戸内晴美



文藝春秋



文春文庫

116—6

奈 落

定価 220円

1977年10月25日 第1刷

1980年10月1日 第6刷

著 者 瀬戸内晴美

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3 千102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文春文庫

奈落

瀬戸内晴美

文藝春秋

奈落

解題

本書は「奈落に踊る」(文學界昭和44年5月号)同年9月号連載、同年12月文藝春秋より単行本刊行)を文庫収録にあたり改題した。

椰子の実際の切り口のようなあの象^{かたち}が、薄く、けれども見誤ることはない確かさで浮き出している。従業員専用と明示されたリフトの扉に射し込んだ朝陽に掌を触れると、そこに鈍い翳^{かげ}が生れた。翳の中から、それは滲み出す。掌を牽^ひくと、乳灰色のスチールの扉は、白っぽい陽光をひたすら反射させるだけの、しみひとつないなめらかな一枚の板になる。もう一度、掌を伸ばす。滲み出る象。リフトは、階段の踊り場の壁際の隅に、曇った鏡を押し寄せたように嵌め込まれていた。手入れを怠った伸び放題の棕櫚^{しゅろ}の鉢植えの陰になって、ほとんど人目につかない。

高梨享子^{きょうこ}が、今、登ってきた階段も、壁際に押しよせられ、誰かにはばかるような狭さと薄暗

さで、くねくね曲っていた。これもほとんど従業員専用なのかもしれない。階段はやや磨り減った色石がはめこまれ、むきだしだった。昨夜から、高梨享子やホテルの客たちの踏んできた廊下や、広い大理石の階段はすべて、深紅色の、縁に紺色の二本の線が通った部厚い絨毯が敷き詰められていた。迷ったらしいと、リフトに片手をあてたまま、高梨享子は立ちあぐねる。彼女の足許から短い廊下が左へのび、突き当りに、栗色の重々しい古風な客室の扉が覗いている。その前を走っている廊下は、例の赤い絨毯で彩られている。あの廊下まで出れば、廊下の角には、各階に設けられたフロントがあり、鍵番が彼女の位置を覚えてくれるだろう。花の彫刻のほどこされた大理石の手摺に飾られた広い階段も、客用リフトもすぐそこにあるのかもしれない。又は吹き抜けになった一階のホールを見下す環状のロビーに出られるだろうか。公園のpromenadのように環になっているロビーを手摺に沿って歩いて行けば、美容室は見つかる筈だった。それは確か旧館五階にあると聞いている。

高梨享子は、赤い廊下へ出ようとして、からだ軀を動かす拍子に、無造作に扉を撫でた。すると、彼女の見たものが、かすかながら、執拗な感触で、彼女の指の腹にねばりついてきた。線は、あるかないかの凹みを持ち、切れることなくつづいている。落書は、単純に描かれたものではなく、何か、鋭利な刃先を使って、ひっ掻き、彫りつけられたものらしい。塗りかくすための塗料が、薄かったせいで、水中の魚の鰭ひれのように、気まぐれな影をちらつかせたがる。深夜か、それとも未明の人氣ない時を狙って、手に力をこめ、生真面目な表情でこれを彫りつけている男の背――

中指の腹で、改めてそれをゆっくりなぞり終えた時、予期しなかった爽やかさが、彼女の胸をみたしてきた。押え難い微笑が唇をゆるめてくるのを、齒を噛んで顎をひきしめる。関谷謙吾が、奈美市のホテルのバーの、黒光りのするカウンターの上に、濡れた指で描いていた稚拙な可愛らしいこの象。もしあれを見なかったら、隣に席を占めた見知らぬ旅人どうしとして、彼女が二杯のブランデーを飲んだだけの時間、並んで坐り、それっきり互いを見失い、忘れる筈だった。忘れるというより、お互いの顔さえ、まだ確かめあわないまま、背をむけあった筈だった。

高梨享子がバーの止り木に腰をおろし、ブランデーを注文したとたん、四人連れの外人客が入って来て、彼女は自分の止り木からひとつ左の方へ席を移さなければならなくなった。移った席の隣に先客の男が、ウイスキーを飲んでいた。バーテンが彼女の前にグラスを置いた時、男が角のとれた氷だけが沈んだタンブラーをバーテンの方へ押し出した。タンブラーに弾みがつき、彼女の前へすべりよってきた。氷が触れあい透きとおった音をたてて身を揉んだ。男が小さく、や、といったのと、バーテンが失礼しましたといったのが重なった。高梨享子は上体を大きく動かし、男の方へわざと視線をやらす、ブランデーグラスを掌にはさみこんだ。ホテルで見知らぬ男に口をきくすきを与えるほど、彼女は若くも、初心でもなかった。やがて男の前にもウイスキーの入ったタンブラーがかえっていくのを目の端に見た。

バーテンが、彼女の合図で、二杯目のブランデーを注ぎに来た時、ふたたび、爽やかな氷の触れあう音をたてながら、彼女の真前に空になったタンブラーが走りよってきた。まるで、彼女の

グラスが空になるのを見はっていて、速度をあわせて男のウイスキーも飲み終えていたようにみえる。バーテンはもう、二人の方へいっしょに軽く頭をさげただけで、口もきかず、自分のすべきことをてきぱき果した。彼女のグラスにはブランデーを、男のタンブラーには割りたての水をいれかえ、ウイスキーを注ぐ。

高梨享子は二杯目のブランデーを飲みほす間も、男を無視しきって、視線を宙に泳がせていた。ひとりで酒を飲む時の、のびやかな解放感と、背骨がきしむような寒々しい孤独感の中に、同時に自分を解き放ち溺れきらせていた。その間じゅう、男がずっと、彼女の横顔に、視線をあてつづけながら、オンザロックを口に運んでいるのを識っていたが、軽い酔いが彼女を寛容にし、その視線も、すでに全く気にならなくなっていた。彼女が、ゆっくり、首を男の方へ廻したのは、壁にかかっている筈の時計をさがすためだった。肌に衣類以外の物を着けるのを極端に嫌いな彼女は、旅に出ても時計はハンドバッグに押しこんだままだった。腕輪はもちろん、結婚指輪さえぬきとってあった。電気時計は、やはり男の真上の壁にアフリカの土人の面と並んでかかっていた。時間を確かめ、三杯めはもうやめにした方がよさそうだと考えた時、高梨享子は、隣の男が、片肘ついた左手で頭を支え、あいた手の指で所在なさそうにカウンターに落書きしているのを見た。ウイスキーに濡らした薬指の動くまわりに、もうすでにいくつも描かれているものを見て、彼女はこみあげてきた笑いをおさえるために軀を硬くしなければならなかった。それはおよそ稚拙なあまり、当然の淫らさがなく、いっそ可愛らしかった。それとも彼女の酔いのせいだったの

か。彼女が見たことを男が感づいているのがわかり、彼女は止り木から下りようとした。むやみに高い止り木だったことを忘れていた彼女がよろめいた時、当然のように男の手がのびて彼女の手を取って支えた。

謙吾が着いたら、黙ってここへつれてきて、この扉に触らせてやろう。享子はそう思い、手を横にすべらせると、扉の横の壁に縦に二つ並んでいる三角型のボタンの下のを、軽く押した。扉は、待ちかねていたような素速さと素直さでたちまち壁に呑みこまれ、誘いこむように入口は大きく縦にさけた。リフトの中は真赤だった。享子は目をみはった。すぐそれは内壁にたらしされたウールのカーテンの色だとうなずけた。享子を呑みこむやいなや、巨きおおな獣の口のように、リフトは慌しく閉った。いつか、夢で、こんな箱の中に閉じこめられ、出口を探して四方の壁を叩きながら、泣きさけんでいたことがあったような気がした。赤いウールのカーテンは、よく見ると、所々に黒い汚れのしみをつけ、毛脚も磨りきれていた。荷物の運搬用に使う時、荷物を傷つけない用意に、そのカーテンの蔽いが下げられているのだとようやく納得する。それにしても、出口のない箱の中はあまりに赤く、享子は骨まで赤く染りそうな目まいを覚える。

子供の頃、何度か見た奇術の箱美人の舞台が浮んでくる。スパンコールが星のように散らばっている薄い、肌の透ける裾長の服を着けた少女は、必ず痛々しいほど痩せていて、青白い蠟のような肌をしていた。光りすぎる金具で仰々しく装飾された巨大な宝石箱のような箱は、真中から真二つに割れ、見物席に、中は種も仕掛けもない空洞であることを念入りに認めさす。箱の中は、

いつでも、息をのむほどの鮮かな真紅のビロードで張りつめられている。少女が、奇術師の神秘的な指の合図で、しずしずと吸いこまれるように箱の中へ入っていく。蝶を包みこむ赤い花卉のように箱は両側からおもむろに翼を慕いよらせ、たちまち、少女を赤い空洞の中に抱きこんでしまう。幼い享子は、いつもその瞬間には、ここで目ばたきしてはならないと、箱をみつめながら、あまり力をいれすぎて目をみはっているため、かえって必ず、そこで眼瞼が痺れてひきつり、大きく動かさずにはいられなくなってしまう。その一瞬にこそ、奇術師が魔法をかけるのにちがいない。箱の中の少女は、享子の眼の中で、みるみる真紅に染めあげられていく。同時に少女の軀は手足の先から透明になり、たちまち赤い硝子人形のように隈もなく、透きとおってしまうのだ。奇術師が、長い大鋸をふりかざし、箱をわざと時間をかけて、じらしながら、ゆっくり寸断していく間、享子は小さな掌を握りしめ、叫び声や呻き声を洩らすまいと、自分の口にしっかりと押しあてている。舞台と客席が、真空の中に投げこまれたような息づまるあの気の遠くなる恍惚の時間。鋸の鈍い音が不気味にひびきわたる度、享子は緊張しきった自分の骨が切り刻まれているような目まいを覚え、全身が硬く凝り固まる。その刹那、享子は自分と箱美人との区別がつかなくなる。自分もまた真紅に染めあげられ、内臓まで透きとおりと、血も凍りついて流れを止めてしまった人間になったように思う。鋸がいつそう勿体ぶってきしみをあげながら前後に重々しく動く度、箱の中の美少女の軀が、固い飴のようにひき砕かれ、細い硝子棒に化してしまった。無数の血管が、透明な赤い粉をまき散らしながら寸断されていくのが享子の目に映ってくる。

リフトの上部の黄色いランプが、せわしくまたたき、リフトの行先をうながしている。箱美人の幻想からよびもどされ、享子は一掴みほどのボタンが片隅に集っている一番下の端の、黒いボタンに指をあてる。自動式リフトにひとり乗った時に必ずおこる、一種の眩暈めまいをよぶ恐怖感が早くも享子の下腹部をくすぐるように冷たくしてくる。その落着かない不安定な不快感は、リフトが下降運動を始めると同時に、いっそう激しく享子の下腹部に拡がっていき、ほとんど背中まで浸していく。

11
享子は高所恐怖症を感じないかわり、高みから下降する時、恐怖とも不安とも定めようのない名状し難い感覚に襲われ、全身が粟だつ癖があった。子供の時からだったと享子と思う。痩せた背の高い子守りの、洗濯板のような背から、まだひどく小さい時分、薄い肩にしがみついていた指を、むりやりもぎ放され、ふるい落されたような記憶が、かすかに残っていた。母にも叔母にもそのことについて確かめてみたことがあったが、相手にされなかった。痩せた赤毛の少女が、子守りとして、ほんの短い間、享子を毎日背負いに通っていたことだけは二人とも認めた。母が胸を病んで、一年ほど、家を留守にしていた時のことだという。「いいえ、そのうちの一カ月ばかりよ。すぐ、肥った、お釈迦さまみたいに、紫色のほくろが額の真中にあるばあやが来たじゃない。享子ちゃん覚えているでしょう、ばあやのほくろ」叔母が母の療養中のことなら、自分が一番くわしいといって話してくれた。「だってたしか、あの時は、あなたはまだ満一年をやっとすぎたばかりの筈よ。そんな時のこと覚えているわけがないじゃないの、幼児の記憶って、少く

とも三つか四つくらいからじゃないの」それが癖の断定的な口調で、叔母は享子の質問を一笑に付した。誰も、その子守りの名前を覚えてゐる者はなかった。「映画か何かで、そんな場面見たんじゃないの、それとも、本のどこにあつた情景じゃないの、人の経験と自分の経験が混同してゐんじゃないかしら」叔母の口調は熱心に饒舌じょうぜつになればなるほど、そこから誠意がぬけていつて、上の空に喋っている感じを強めてくる。享子は叔母のことばかり、さらに深く記憶の底に埋めこまれていたひとつの情景と、肉体にこびりついていた恐怖の、肉感的な感覚をよびさまされた。

その時のことは、少くとも享子がすでに学齡に達していた時だったから——享子はその日、何か学校でほめられたことがあり、一刻も早く、それを母に告げたくて、息せききつて駆けて帰った——一度思い出すと、気味が悪いくらい微細に鮮明に、すべての情景がよみがえってくるのだ。靴をぬぐ間を惜しみ、玄関から入らず、庭へ廻り、母のいる居間へ縁側から走り込もうとすると、そこに赤ん坊がいた。首と、手首を糸でくくりあげたようにまるく肥えた見知らぬ赤ん坊は、縁側に近い座敷の端に、庭にむいてレギンスの脚を開き、投げだしていた。片手の拳をよだれの光る唇にあて、片手にセルロイドのガラガラを持って、しきりに畳を叩いている。まだ顔だけでは性別の見分け難い赤ん坊くさい表情をしていたが、腰はしっかりと坐っていて、拳をはなすと、濡れた唇からは思いがけないほど大きな前歯が二本のぞいていた。座敷の長火鉢の前で、母とむきあっていた女客が、ちらと、享子の方に目をむいた。遠縁だと聞いているその女は、一

年に一度か二度、ごく稀に訪れる程度の間柄なので、享子はほとんどなじんでいなかった。女客はまだ話の中から覚めきらないように上気した頬に、目を強く光らせて、睨むように享子を見据えた。そのくせ、享子は女が自分を見ず、享子の顔を越え、はるか隣の屋根を見ているように感じた。それっきり、にこりともせず、すぐ母の方にむき直り、低い聞きとれない声で、話のつづきをはじめた。「おんぶさせて」享子は固い目つきの女客ではなく、客の肩越しにこちらを見ている母にむかって、甘えた声をだした。

母が危いからだめだという声の下から、女客がばね仕掛けの人形のように唐突に軀を起し、真直ぐ、縁側へむかってくると、いきなり赤ん坊を背後からすくいあげ、享子の方へつきだした。赤ん坊はガラガラを握ったまま、手足を小犬のように縮め、いっそうだれを流した。享子は女客の吊り上ったような目に射すくめられ、もう赤ん坊など背負う気持はたちまち萎えきってしまったのに、仕方なしに背を女の方へむけた。「いいですか。重いですよ」女はさっきの話し声とはちがう、甲高いひきつった声でいい、ずしりと、赤ん坊を享子の背に押しつけた。その上に紐もかけないで、女客は「ほら」と、つぶやき、とんと、赤ん坊の背ごと、享子を突きやるように押し出した。享子は女から故意に、不当な意地悪をされているような、屈辱的な気持になった。その場で赤ん坊をふり落とし、逃げだしたくなったが、口惜しさが、心細さと惨めさに打ち勝ち、物もいわず、そのまま、裏庭の方へよろけながら歩き出した。

赤ん坊の軀は思いがけず熱く、燃えているようだった。享子はたちまち自分の背まで、その熱

さでとかされそうな気がしてきた。見かけよりはるかに重くて、一步毎に、享子の細い実のいりぎらない脚をよろめかせてくる。背中は曲げきりにしておかないと、とても重く、のぼしてはいられなかった。その上、赤ん坊は、ほとんど享子の肩に擱おまろうとしないで、重心をとらないので、まるい俵でも背負わされているように不安定だった。享子はふり落すまいと思う一心から、か細い背をただひたすら折り曲げ、足をふんばりつづけていなければならぬ。裏庭から木戸の外へ出ると、細い道をへだてて、雑木林がなだらかな斜面を蔽おほい、この台地の下の窪地の町へ降りていた。林は子供たちの恰好の遊び場所だった。享子は重い荷物にあえぎながら、とにかく遊び馴れた林の傾斜に入って腰をおろしたいとあせった。道を横ぎり、享子が林の斜面に片足踏み入れた時、のびた草の中に足をすべらせ、一挙に重心を失った。草の中の去年の落葉が享子の足をすくうのが早かったのか、背中の赤ん坊がいきなりのけぞったのが早かったのかわからない。つづいて享子はもっと烈しい力で足をすべらしており、その瞬間、赤ん坊は頭からさかさきにのけぞって、享子の背中から離れていた。頭からとわかったのは、夢中で力をいれた享子の手に、最後まで赤ん坊の片足首が残っていたからだ。享子の手に残っていた片足も、強い力で抜け落ちると、赤ん坊は頭から道路に打ちつけ、火のついたように泣きだした。享子もその場に、もろに尻もちをつき、立ち上れなかった。起ってしまったことの怖しさのあまり全身が冷たくなり、涙も泣き声も出てこない。赤ん坊がずるっと、まっさかさまに落ちていく時の感触を想い出しただけで、享子は息が止るようだった。

泣き疲れて芋虫のようにおとなしくなった赤ん坊を、どうにか道端に坐らせ、その前の斜面に自分は腰をかかめ、背中に赤ん坊の軀をもたれかからせ、傍の樹の幹にすがって、ようやく立ち上るという方法を見つけ出すまで、享子はどれほどの時間が、林の中にすぎたのかわからなかった。

家にたどりつくと、女客と母親はもう薄暗くなった座敷に姿をとけこませそうになりながら、まださっきの姿勢のままで話しこんでいた。女客はしきりにハンカチを目にあてている。ふたりとも享子の足音にふりむいてもみなかった。

その日以来、享子は、あの女も落した赤ん坊も見ることがなかった。誰であったか、どうしてあれっきり、家に来なくなったのか、母に訊いてみた覚えもない。赤ん坊が成長するにつれ、白痴になっているのではないかという不安に、相当大きくなるまで、時折人知れず脅迫されつづけたが、誰にむかって、あの日の過失について洩らしたことはなかった。

もう全く思い出すこともなくなっていたこんな遠い記憶が、なぜ、今頃いきなりよみがえってきたのか。享子は、今夜、謙吾を迎えたら、ふたりの時間のどこかで、おそらくこの話をしてしまうだろう自分を感じた。

雪なんだよ。昨夜、夜なかから降りだしたらしい。眠る前は星が出ていたんだから。……凄い大雪だ。そっちはどう。……うん、今だって、向うが見えないくらい降りしきっている。……不可抗力なもの、仕方がないだろう。……わからないな。雪次第なもの。……列車が飛行機かどれ